〈公と私〉をめぐる単層的な決定の帰結

―里見脩『言論統制というビジネス』―

松尾理也

はじめに

表題の「単層的な決定」とは、吉本隆明『重層的な非決定へ』（大和書房、一九八五年）から来ている。吉本は「重層的な非決定」という考え方について、「平たくいえば「現在」の多層的に重なった文化と観念の様態にたいして、どこかに重心を置くことを否定して、層ごとにおなじ重量で、非決定的に対応するということです」と述べている。

「多層的に重なった文化と観念の様態」を単層としてとらえれば、すなわち「世界の諸層を単層であるかのように短絡」させれば、「見かけ上は擬似的な倫理を産出」することが可能となる、というのが吉本の主張だ。たとえば、〈前線で生命がけでたたかっている兵士のこともかんがえずに、遊んでいるのは何事か〉といったように。それはまやかし、あるいは恫喝の手段に過ぎない、と吉本はいう（一）。

戦時下の言論統制をめぐる新聞人やメディア側の人々、政治家、経営者、そして大衆の思惑のからみあいをあたかも一編の戦国絵巻のように描き出した本書を読み終えて、評者の脳裏に浮かんだのは、吉本のこんな指摘だった。

本書は、『新聞統合―戦時期におけるメディアと国家』（勁草書房、二〇一一年）で、現代日本のメディアが

かかえる矛盾や不自然さの原点ともいえる戦時下の新聞統合について掘り下げた里見脩の近刊である。新聞統合という具体的な事象に焦点を絞った『新聞統合』に対して、本書は映画、ラジオ等新聞以外のメディアにも目を向け、広く戦時下の言論統制について再考を試みている。

浮かび上がるのは、往々にしてわれわれが持つ、戦時下の暗黒の世相、弾圧されるメディアそして国民という一般的イメージではなく、自ら熱狂し、また儲けに向かって突っ走るメディアそして国民の姿である。里見はそれを、朝日新聞主筆、そして情報局総裁を務めた緒方竹虎の言葉を借りて〈新聞資本主義〉と呼ぶ。

本書の特徴は言論統制を遂行するにあたって枢要な役割を果たした機関として通信社に着目していることである。これは、時事通信社の記者出身という経歴を持つ里見ならではというだけではない。「言論統制」とひとくくりにするだけでは見えてこない歴史の襞に分け入るためにこそ、通信社という存在に着目しているのだ。なぜならば、通信社こそ、日本の情報を海外に発信し、国威発揚をめざす「公」の存在でありながら、広告という営利事業に基盤を置き、「私」の利益を追求するという、相反する側面を持った存在だったからである。

であるならば、通信社への里見の着眼は、戦前の言論統制を、「公」と「私」という異なった層を短絡させることで擬似的なまやかしの論理を生み出したプロセスとしてとらえ直すものではないか。本書の構成を簡単に振り返りつつ、戦時下の言論統制を見つめ直すことで浮かび上がってきた日本社会全体にかかわる問題点とはなにか、考えてみたい。

国益と私益との間で―通信社の誕生

わが国における近代的な意味での新聞は明治期に始まるが、その姿は現在とはずいぶんと異なる。里見は、①多数の新聞が存在した②新聞が政党と深い関係を有

していたーという二つの特徴を挙げる。現在の三大全国紙（朝日、毎日、読売）体制や、「まるで××党の機関紙だ」という指摘が新聞に対する非難や軽蔑である現代の常識とはまるで違う世界が、そこには広がっていた。

そうしたメディア界の特性が生み出したのが、通信社である。明治期には政治主張を系列の地方紙へ頒布することを目的とした通信社が多く誕生し、新聞が大衆社会に向けて拡大を始めた大正期には一般ニュースを頒布する通信社が力を付けた。二強として存在感を示したのが「帝国通信社（帝通）」と「日本電報通信社（電通）」だった。帝通は立憲改進党の基幹通信社として設立され、改進党（後の民政党）系の地方紙を基盤とした。現在は広告代理店として知られる電通は、政友会系の地方紙を顧客としたが、広告代理店業もあわせて業務展開したところに特徴があった。地方紙は中央ニュースもほしいが、中央からの広告出稿もほしい。そこで電通は、地方紙にニュースを配信すると同時に、広告代理店として広告の掲載も取り仕切った。ニュースの代金は広告料金で相殺するという画期的な仕組みだった。

その後国際関係ニュースを専門とする国際通信社（国際）が一九一四年に登場し、帝通は放漫経営から姿を消す。国際は外務省に接近し、海外への情報発信を旗印とする聯合通信社（聯合）に発展、ここに「電聯二大通信社」時代が昭和初期に現出する。こうした複雑かつあまり知られていない通信社の歩みを手際よく描き出す里見の筆は、通信社が担う「公と私」の二律背反をもあぶり出す。

「電通は一九三二年には銀座に地上八階、地下二階二〇〇〇余坪の社屋を落成させるなど安定した収益を上げていた。（中略）通信社の部門は総収入の四割程度だが、総支出では八割を占めるというように、「広告で稼ぎ、通信を賄う」方式で堅調な経営を維持していた」。電通は当時から営利企業として優等生であった。それは翻せば、「私」の重視といってよい。一方、聯合は国

際時代から絶えず経営に苦労し、資金を賄うために外務省に接近した。なぜそうしてまで通信社を続けようとしたかといえば、それは海外への情報発信や国内での世論形成のためであり、ひいては国威発揚という「公」のためであった。

「公」というかんがえかたに政府は反応した。大正期に陸軍省新聞班、外務省情報部、海軍省軍事普及委員会が設置されるが、里見は「外務省は国際世論形成、陸海軍は国内世論形成にメディアを活用することを意図」していたと指摘する。電通は、聯合が外務省から補助金を受領していることから、陸軍に接近し対抗した。「公」の重視は、一九三一年の満州事変勃発によって手が付けられないほどまで大きくなっていく。

言論統制のポイント・オブ・ノーリターン
―満州事変

満州事変勃発は電通の満州支局がスクープした。この事実は、電通と陸軍との関係を鑑みれば示唆的である。もっとも、華々しいスクープは、その後の大新聞の変節の序章にすぎなかった。「朝日、毎日の全国二紙は、大勢の従軍記者を現地派遣し、戦地で撮影した写真、映画の上映会、従軍記者や軍人の講演会、記念品展覧会、慰問金の募集、軍歌の献納など多種多様な企画を実施し、記事ばかりでなく戦争に協力する事業も展開した」。

こうした新聞の姿を、現代のわれわれは知らないわけではないが、どこかしら、それは政府による弾圧の結果、いやいやながら強いられた結果だったと解釈してはいまいか。里見はそうした先入観を検証し、覆していく。リベラルと目された高石真五郎（当時の大阪毎日主筆）について、「外国生活が長くてリベラルな考えを持っていた人だが、満州事変に関しては、非常な強硬論でした」との証言を挙げているのもその一つである。

「公」への傾倒は、メディアにとっての利益増とい

う「私」と一体であった。「新聞は非常時によって飛躍する。朝日の満州事変以来の発展ぶりはあえて異とすべきでないが、内外にわたるビッグ・ニュースの頻出、国際情勢の緊迫化は、編集面にも経理面にも著しい結果となって顕れた」。朝日は戦後になって編纂した社史においてなお、そう書いていると里見は指摘する。

こうした状況を、里見は朝日の緒方竹虎の戦後における発言から引用するかたちで「新聞資本主義」と指摘し、その意識が言論統制の根本に存在したとみる。『言論統制というビジネス』という書名はここに由来するが、同時にそれは、「公」と「私」の野合であったともいえよう。

「公」が言論を統制することの理由やタテマエを供給し、その裏側で「私」が実利や見返りを受けとる。この構造を最大に謳歌した存在のひとつが、「今次事変に於いて（中略）最も熱烈なる日本主義の鼓吹者となった」（『日本新聞年鑑』一九三八年版）朝日新聞であったことは、すでにしばしば指摘されている事実ではあるが、繰り返し、また継続的な検証とともに語り継がれるべき歴史であろう。

国策という御旗―同盟通信社

通信社の興亡から映し出される戦前の言論統制の流れの頂点に位置するのが一九三六年一月、「電聯」が合併した新通信社「同盟通信社」の発足である。

戦時体制が強まるにつれ、「公」と「私」の相克は、さらに深刻な様相を見せるようになる。そうした局面の主役として、里見が描き出すのは、同盟の二代目社長である古野伊之助である。

国威発揚、世論形成の先兵である同盟の代表として、古野は当然「公」を体現する人物といえる。だが、それは古野が公明正大で清廉潔白だったことと直結するわけではかならずしもない。古野は同時に、「策士」であり、軍部に迎合する言論統制の主導者でもあった。里見はつとめて古野に関する善悪の判断を避けている

が、それゆえに、というべきか、古野の、さらにいえば「公」の持つ複雑な陰影を描き出すことに成功している。

本書が描き出す戦前のメディア界戦国絵巻において、古野の対極として「私」に執着する人物として配置されるのが、読売を率いる正力松太郎である。初代同盟社長の岩永裕吉が一九三九年に急逝し、同盟の次期社長の人事問題が浮上した際、正力は古野の就任に強く反対する動きを示したという。

古野が絶えず「公」を考え続けた人物であり、正力が同じく「私」を考え続けた人物であるとすれば、古野を評価し正力をうさん臭く描くことは容易であろう。

だが、里見はそうしたわかりやすい図式を採用することなく、淡々と経緯をたどり事実を積み重ねていく。

曲折経た総仕上げ―新聞統合

戦時下における言論統制の集大成として描かれるのが、一九三八年からはじまり一九四二年末に完成する新聞統合のプロセスである。

言論統制が掲げる「公」の看板の下には、実に多彩な人物が結集したものだとため息をつかざるを得ない。「単なる軍事専門家の枠を越えた行政的能力を有する軍部官僚」として「政経将校」と呼ばれた軍人たち。「世界史的な危機状況の認識に立って、自由主義と個人主義の行き詰まりの意識から新しい世界観に基づく国家改造を目指した」革新官僚の面々。新聞社の権力闘争から弾かれたルサンチマンを胸に軍部に接近する元新聞記者たち。全国紙の脅威に対抗するため言論統制という「公」に争って我が身を差し出そうとする地方紙経営者。結果として競争がなくなったことによる安逸をむさぼる新聞販売店。

そのなかで、敢然と「私益」を追求する正力はむしろ、清々しい存在にみえる。正力は単なる直情漢ではなく、レトリックを自在に構築できる戦略家でもあった。当時の新聞用紙不足から、割当の基準となる「一

ヶ年間の有代発行部数」の調査・発表を求められた際、発行部数を秘中の秘として押し黙る各社のなかで唯一、正力だけが公開を主張した。部数の公開は、「公」への貢献といえる。しかし、それは建前であって、正力が公表を主張した本心はそこにはない。「「読売は、東京の有代発行部数が最多である」という自信と、それが実数で裏付けられれば、読売の存在は確固たるものになるという思惑が働いたため」であった。

本書は、現在もアクチュアルな課題であり続けている記者クラブ問題の源流にも触れている。「戦時下に形成された記者倶楽部の形態は、現在の『記者クラブ』としてそのまま継続されている」。原寿雄は一九七九年に、洪水のような発表による情報操作を危惧して「発表ジャーナリズム」との警鐘を鳴らした(二)が、本書の以下の記述をみれば、その源流は戦時下にあり、またその危険性もきわめて早い時期から認識されていたことがわかる。

記者倶楽部が完全に当局の管理下に組みいれられたことの弊害を、伊藤正徳は「自由取材は記者を記者たらしめる根本の要素である。(しかし、記者倶楽部によって)記者は自ら動く必要もなく、また動いても意味を成さなくなった。『記者は足で書くのだ』と教えられた大正時代の記者訓などは、出鱈目の言葉としか受け取られないようになった。記者はただ『発表』を待っていればよかった」と指摘している。戦時期に醸成された「ただ発表を待つ」などという記者の意識も現在に繋がっていないだろうか。

おわりに――「公」と「私」の相克

里見によると、「古野の国家に対する意識は、同盟が公益法人の「国策通信社」であったこともあり、国家との間に「距離感」はなかった」という。とすれば、

「公」の名の下に踊った人びとの中で、古野が別格である理由もわかる。ほとんどの人物は、「公」のタテマエの中にどれだけ「私」のホンネを紛れ込ませることができるかを競った。そもそも「私」の少ない古野がそれだけ信頼と尊敬を集めたのは当然である。

古野の片腕として日本新聞会理事を務めた岡村二一は「新聞の本質的矛盾は、公益性を有する国家国民の公器なるにも拘らず、その経営形態が資本中心の営利企業である点にある」とし、「営利第一主義を封じ、資本中心から国家中心へ、売れる新聞から良き新聞、役立つ新聞へと集中発揚せしめる」ことをめざした。古野の統制に対する基本的考えもそうしたものであった、と里見はいう。しかし、それは古野の業績が疑問の余地なく顕彰されるべきであるということを意味しない。

通常、「公」は清潔で高尚なものだと思われているが、印象に残るのはむしろ「私」の持つ清廉さである。「良き新聞」「役に立つ新聞」などという言い方は現代においてはどこか禍々しい。

〈古野＝公／正力＝私〉の構図を描くのはたやすい。しかし、その構図をどのように判断し、またどのような教訓を引き出すべきかは、それほど簡単ではない。「私」はどのようにデザインされ、どんなふうに「公」のために作動すべきものなのか。「公のため」といった途端につきまとう居丈高さへの解毒剤としての「私」の効用はあろうが、といって野放図な「私」の放置が問題であることは昨今のネット状況を見てもあきらかである。

戦後、戦犯として巣鴨プリズンに共に入獄した古野と正力は、獄で同じ房にあった。釈放後、正力は衆院選に出馬し当選するが、古野は政治の表舞台に立つことはなかった。佐藤栄作が古野に、日本電信電話公社の経営委員長を無報酬で打診したときには、「利益を目的としない公社であることや無報酬が気に入った」として受けたという。

古野の通夜には、正力が列席した。戦前に新聞社

社長を務めた中で通夜に列席したのは正力だけで、犬猿の仲と思われていただけに、「霊前に焼香、しばし瞑目する正力の姿は集まった人びとの心を強く打った」という。

対照的な二人は、実はお互いをよく理解し合っていた。すなわち「公」と「私」それぞれの限界を、よくわきまえていた。そう思わせるエピソードである。

冒頭で触れた吉本に戻れば、〈世界の諸層を短絡させることによってまやかしの倫理を産み出す〉手法は特にめずらしいものではない。政治家のレトリックから反社会勢力のいちゃもんまで、われわれが今も日常的に直面しているまかやしの基本的生産手法にすぎない。むしろ考えるべきは、人びとがそうしたまやかしをまもなく「声をあげて指弾する叡智を獲得とするでしょう」とした吉本の予想(三)が一向に実現する気配のないことだろう。

そう考えれば、「公」の硬直よりも「私」の堕落よりもさらに懸念すべきなのは、「公」と「私」を短絡させ、見かけ上の擬似的な倫理を産み出す手法ではないか。とすれば、「公」を「私」に短絡させることで遂行された戦時言論統制の顛末は、今も学び取るべき教訓に満ちている。同時に、その重層性ゆえにしばしば単純化されて描かれ論じられがちな戦前の言論統制史についての、本書は格好の水先案内になっている。

(一) 吉本隆明『重層的な非決定へ』大和書房、七二頁。
(二) 原寿雄「発表ジャーナリズム時代への抵抗」『新聞研究』一九七九年一二月号、一六―一三頁。
(三) 吉本、前掲書、七三頁。